JASO発 暮らしつづける街へ<第16回>

飯岡の津波を語る。① ～千葉県旭市飯岡～

聞き手：広報委員会 三木 剛、坪内真紀
写真：坪内真紀

飯岡漁港

2011年3月11日、宮城県牡鹿半島沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生し、岩手、宮城、福島を中心とした太平洋沿岸部を巨大な津波が襲った。死者・行方不明者をあわせ約1万8千人の犠牲者を出した未曾有の震災である。

震源から離れた関東でも津波による死傷者を出した地域がある。千葉県旭市飯岡。地震発生から2時間以上が経過してから押し寄せた大津波が一帯を呑み込み、行方不明者を含む16名の犠牲者を出した。「隠れた被災地」として記憶される地域である。

今回、飯岡で自らも被災し、現在はNPO光と風の理事で「語り部」として活動を行なっている高橋進一氏と、同プロジェクトメンバーの渡辺義美氏、船倉武夫氏、加瀬和男氏にお話を伺った。

飯岡を襲った津波

――飯岡の（遅れてきた）大津波のメカニズムを詳しくお聞きかせ下さい。

船倉　震源地から来た津波が、犬吠埼で「回折波」となり屏風浦沿いの飯岡に到達しました。それが１波、２波に当たります。その１波、２波の津波が九十九里沿岸に沿って行き、太東岬（九十九里浜南端部）から跳ね返ってきて、震源地からの３波目と太東岬から跳ね返ってきた波が九十九里沖で合わさって巨大化したようです。

千葉県での津波による浸水域としては山武（さんむ）市の方が広かったのですが、山武市は海岸から人家が離れていたのと、海沿いに蓮沼海浜公園があったり、防風林が津波の勢いを減衰させたようです。飯岡は海岸と人家が近く、津波による被害が大きかったということになります。

渡邉　飯岡の防潮堤は４ｍありました。３波目は7.6ｍの津波と言われていますが、地震による停電があり検潮器が動かない状況でしたので正しい計測がされているとは言えません。ただ目視した限りでは４ｍの防潮堤を軽く超えているので、７ｍ以上の津波といえるのではないでしょうか。

船倉　地区の地形図を見ると海抜６ｍの等高線にちょうど沿うように津波が来たことが確認できます。

――津波以外の被害はありましたか。

船倉　旭市内で液状化現象が発生しました。

渡邉　昔、旭市の海上（うなかみ）地区や野中（のなか）地区で砂鉄を採掘していたのです。その鉱区の埋戻しが不完全な状況だったようで液状化が相当ありました。

船倉　地域の地質としては砂が基層ですが、鉄を含んだ砂であるため比重が重く、しっかりとした地盤ではあったんです。ただ砂鉄を採掘して埋め戻した土地は、液状化の被害がありました。

――地中埋設の排水管や水道管なども被害に遇ったということですか。ライフラインの復旧にも相当の時間がかかったでしょうね。

船倉　それがそうでもなく、この辺の地域では個別浄化槽や簡易水道型の井戸がほとんどでしたから、地域全域が一斉にライフライン不全になることは起こりませんでした。ガスもプロパンですので、復旧の仕方も部分復旧

回折波のメカニズム：犬吠埼のような尖った突端に津波が当たると、その波が海岸線に沿って行く現象

工事だったため、ライフラインの復旧も比較的早かったです。同じ千葉でも浦安のような液状化被害とは違います。要は“まち”のつくり方の違いなのでしょう。地震災害からの復旧では飯岡のような昔ながらの“まちづくり”が強いのでしょうね。ハイテク化されたまち(浦安)よりローテクなまち(飯岡)の方が、被災後の復旧では有利に働いたのでしょう。

加瀬　飯岡の津波について、よく“隠れた”被災地と言われますが、私は“忘れられた”被災地と考えています。13年前の「平成の大合併」により今の旭市になり、その6年後に震災がありました。その頃、私は旭市の水道関係の職員をしていて、地震発生後は旭市役所で待機していました。そのときの様子としては「飯岡の方が大変みたいよ」といった程度の認識しか無かったように記憶しています。

旭市としては一つの市ですが、旧干潟町、旧海上町、旧飯岡町、それぞれ文化が違うんですね。この狭い地域でも土着的文化が違います。横の繋がりも、交流もあまりなく、3.11の震災があったとき、まるで他人事のように隣り町で起きた出来事を捉え、我が身に起こった事

海沿いに建っていた建物は津波により大きな被害を受けた。

と思えなかったと考えています。その根っこにある部分が、津波災害を軽視していたんだと思います。

かたや旧海上町でも地震による液状化が多くありました。私は水道職員ですので被害調査をしたのですが、新しくまだ住めるような建物が傾いていて、取り壊された建物を多く見ました。飯岡では人的被害が出て注目されますが、旧海上町の方でも建物被害は相当ありました。旭市全体という括りで見ると、津波被害だけではなく、液状化による建物被害も相当ありました。

<次号へ続く>

渡辺義美（NPO光と風　理事長）
復興観光まちづくりプロジェクトリーダー
飯岡宿泊組合長
飯岡カントリーハウス海辺里（つべり）主宰

船倉武夫（NPO光と風　副理事長）
千葉科学大学　危機管理学部 教授 理学博士
旭いいおか文芸賞「海へ」審査委員

高橋進一（NPO光と風　理事）
災害伝承10年プロジェクト「語り部」
旭市防災士サービス介助士ネットワーク
震災前は飯岡で行政区の区長（町内会長）を務めていた。

加瀬和男（NPO光と風　正会員）
飯岡土人形保存会